

「内科診断学」

京都大学教授・臨床疫学 福井 次矢 編集
東京医科歯科大学教授・臨床検査医学 奈良 信雄

東京医科歯科大学教授・生体応答学

宮 坂 信 之

近年、習得すべき医学的知識は急速に増大していることもあり、医学生は枝葉末節の知識ばかりを覚え込み、根幹となる病態生理を理解していない。しかし、疾患の病態生理を知らずして詰め込んだ臨床的知識はすぐに忘却の彼方に消え去ってしまうのがおちである。更に、医学生の中には患者との適切な人間関係を保持するのが困難である人たちが意外と多い。挨拶ができないばかりか、相手の眼を見ることもできず、会話のための適切な語法も知らない。もう1つの問題点は医学生に問題解決指向型思考が欠落していることである。自らの頭で問題点を抽出し、これを priority の高い順番に並べ直して鑑別診断を行うという能力が極めて乏しい。

このような問題点を踏まえて新たに刊行されたのが福井次矢・奈良信雄両教授の編集になる「内科診断学」である。既に内科診断学書自体は今までに何冊も刊行されているが、この本ならではのユニークな点をいくつか紹介してみよう。まず、本の構成をみると、I 章の「診断の考え方」、II 章の「診察の進め方」に次いで、III 章は「症候編」、IV 章は「疾

患編」と続く。すなわち、症候からのみならず主要疾患からの両方向的なアプローチが可能のように工夫されている。したがって、本書は単なる内科診断学書ではなく、医学生は内科学書として使用することも可能であり、一石二鳥の効果を挙げている。

次に、本書は読みやすいのが特徴である。図表が適当に多く、図は2色の色刷りを使い、簡潔でわかりやすい。組織写真はカラーで鮮明なものが用いられている。また、「診察の進め方」などでは、すべてを写真で説明するのではなく、イラストレーターによる図が用いられている。これなら漫画世代の医学生にも抵抗なく取りつくことができるであろう。

「症候編」では、「患者の訴え方」と「医療面接」という項目が用意されており、医師の用語とは異なる患者の愁訴の表現方法や医療面接の技法が解説されているのが心憎い。対話の苦手な医学生にとってもこれなら役に立つと思われる。次いで、「診断の進め方」という大項目の中では、「診断の進め方のポイント」、「診断のターニングポイント」、「診断確定

のために」という項目がそれぞれ設けられており、鑑別診断のこつがわかりやすく紹介されている。

「疾患編」では、病態生理学的メカニズム、すなわち病気の成り立ちをわかりやすく解説している。これによって医学生は丸暗記を避けることができる。病態生理は疾患の理解には必要不可欠の事項である。これが理解できれば、臨床症状や治療法も類推することが可能になる。この意味において、本書は医学生が問題解決指向型の学習を行うための大きな武器となることが期待される。

最後に CD-ROM 操作ガイドがあり、本書に添付されている CD-ROM の操作法、検索法などが解説されている。これからの“IT 時代”にも即応している。

このように、本書は旧来の内科診断学書の殻を破った斬新な教科書と言えよう。医学生や研修医に有用なばかりか、あらゆる階層の医師の知識のリフレッシュにも有益と思われる。ぜひ一読をお勧めしたい。

● B5 頁 1240 図 483 写真 50
カラー写真 33 表 625 2000
定価(本体 9,500 円+税) 送料実費

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)